



Title	第一部 通史 . 第四編 キャンパスの変遷 . 第三章 北八条キャンパスの誕生 (札幌キャンパス第 期 ) 一九〇三 ~ 一九一八年
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 262-272
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/28165">http://hdl.handle.net/2115/28165</a>
Type	bulletin (article)
File Information	4(3)_262.pdf



[Instructions for use](#)

移管されるとともに、北二条通敷設のために、元の位置から南側へ約一〇〇メートルの現在地へと移築された。その後何度か移転問題が現れては消えたが、いまや市民に親しまれる歴史的建造物としてばかりでなく、北海道大学誕生の地として、札幌農学校北一条キャンパスの痕跡を残す唯一の記憶となっている。

### 第三章 北八条キャンパスの誕生

#### (札幌キャンパス第一期) 一九〇三—一九一八年

本章で対象とする、後期札幌農学校および東北帝国大学農科大学時代の建築については、先に越野武による詳細な報告があり(前掲越野論文)、諸建築の概要にとどまらず、設計者やキャンパス計画についての考察も行なわれている。しかし、この報告の暫く後に、北海道大学事務局の図面倉庫より、この期間の諸建築に関連する建築一件書類が発見された。建築一件書類とは、建築工事に関わる入札・落札などの契約関係書類、仕様書、積算書などの簿冊のほかに設計図面も含んだ一連の書類のことである。この史料により、設計母体である文部大臣官房建築掛札幌出張所と本省との関連、入札および落札の様子、施工者、各建築の細部意匠、仕様変更の様子などが明らかとなった。そこで、本章では、先の報告との重複を避けることも鑑みて、新規発見史料から得られた知見を紹介することに重点を置き、論を進めることにする。

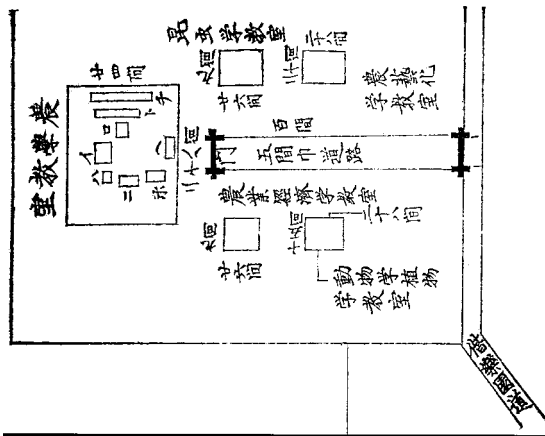
## 第一節 キャンパスの移転と校舎建築の経緯

これまで、札幌農学校のキャンパスが北一条から北八条へ移転したのは、敷地の狭隘、施設の老朽化が理由とされてきた。事実、当時の新聞記事にも「元来同校舎は二十余年前黒田開拓使長官の時代に創設せしものにて漸次朽敗に傾くと教室の構造配置等に於ても兎角欠点多く到底今日の高等學術研究所としては不完全」(『北海道毎日新聞』一八九八年九月二十七日「札幌農学校新築の計画」)とある。しかし、九八年十二月十三日の衆議院予算委員会の答弁では、農場が近接していないこと、市区改正により学校敷地が分断されてしまうことも理由としてあげられている(『北海道毎日新聞』九八年十二月二十一日「農学校改築費」)。そしてなにより、キャンパスの移転を可能としたのは、八七年に北海道庁より旧札幌育種場敷地(p.a.290)の移管を受けたことであった。この敷地は、札幌農学校が所有する農覺園(後の第二農場)敷地にサクシユコト二川を挟んで西に隣接した。二九万三六四九坪余の地積ならびに競馬場のトラック(p.a.292)や育種場諸施設を有し、九五年に第一農場と改称されたものである。九八年九月の新聞記事には「其費額は総て三十余万円なりと校舎は石造木造の二様にして農学教室及図書館は石造に農政、農業經濟及昆虫学の教室は木造となし共に同校附屬農園内(借楽園裏手)に造築し植物学動物学教室は木造にて当時の博物館構内植物研究場辺に設立せらるゝ事ならんと云」(『北海道毎日新聞』九八年九月二十七日「札幌農学校新築の計画」)とあり、敷地は「借楽園裏」という表現から第一農場内で、木造と石造の建築が予定されていたことがわかる。また、翌年五月に寺田文部書記官が来札した際にも、「敷地検定に就ては最も困難する処あり其の結果建造の位置は第一農場中最も高燥広潤なり現今の果樹園近傍旧競馬場の跡にして」(『北海道毎日新聞』九九年五月十三日「札幌農学校の新築工事」と述べているように、新校舎の建築予定地は第一農場を前提に考えられていたことが読み取れる。総敷地面積は四五〇〇坪五合、総額二五万七九一〇円を予定していた(表4・1)。

表4-1 新築予定建物一覧

改築費目	金額(円)
寄宿舎建築費	44,805
農学校教室建築費	44,990
動植物学教室建築費	29,110
理化学及地質学教室建築費	28,950
温度及瓦斯製造所建築費	28,339
寄宿舎附属暖房器費	16,500
図書館建築費	19,520
昆虫学及養蚕学教室建築費	12,420
大講堂建築費	11,420
体操場建築費	7,000
農業経済学森林学教室建築費	14,476
博物館事務所建築費	1,680
外に	
瓦斯製造器一式価額	18,000
教室其他瓦斯管布設費	4,539
講堂演武場等引据費	3,500

「札幌農学校の新築工事」『北海道毎日新聞』1899年5月13日より作成。



圖解 イ 地鎮祭場、口 被處、ハ 奏樂席、ニ 幄舎並神饌調理所、  
 水 職員席、ハ 學生々徒席、ト 來賓席、チ 來賓會食堂

図4-1 札幌農学校繩張りの図

前年、博物館（後の植物園）構内に建築を予定していた動植物学教室は、構内の起伏がはげしく、建設適当地が少なかったため、その後の規模拡張も考慮して、他の教室と同じく第一農場内に建築することになった（『北海道毎日新聞』九九年七月五日「農学校建築費聞」）。

一八九九年六月十三日の起工式を報じた新聞記事（『北海道毎日新聞』九九年六月十四日「改築起工式挙行」）に繩張り園（図4・1）が掲載されており、そこからおおよその建物配置・規模、道路の様子などを知ることができ

る。この図に記載されているのは、当日縄張りのできたものだけで、この他大講堂、図書館、寄宿舎などの諸施設はここから北東の位置に建築予定となっていた。実際に建築された各建物の位置 (Plans) を、この縄張り図と比較すると、農学教室のみが一致し、他の教室はまったく異なる配置をとり、縄張りの敷地寸法と実際に建築された教室の規模も相違点が著しい。ただ、長さ一〇〇間、幅五間の道路を挟んで向かい合う教室の組合わせや、その南北の位置については同じ構成をしている。「札幌農学校改築教室予定図」(図4・2)と題された鳥瞰図を見ると、当初ここに配置予定のない図書館と大講堂がキャンパスの中心軸を構成する一対として象徴的に描かれている。起工式の時点では、あくまで大枠の計画がなされたのみで、実際の設計が進められる過程で、再度、諸施設の規模ならびに配置が決定されていったのである。

建築一件書類から明らかとなった各建築の工事詳細については、表4・2にまとめた。ここでは、具体的に主要建築について工事状況の流れを追うとともに、設計者

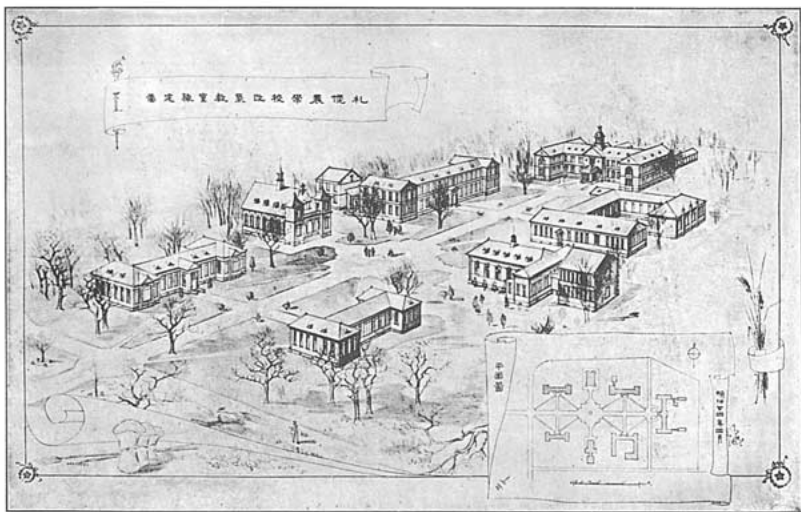


圖 定 預 案 教 築 新

図4 - 2 札幌農学校改築教室予定図

(札幌農学校学芸会編『札幌農学校』1899年所載)

日一覧（事務局施設部蔵、建築一件書類を基礎資料に作成）

工事予定金額	工事請負金額	起工年月日	竣工予定年月日	竣工年月日
1,620円00	1,818円00			明治34年6月15日
40,530円84	4,0514円65	明治33年8月7日	明治34年9月18日	明治34年6月15日
20,565円96	19,400円00	明治34年5月1日	明治35年2月24日	明治34年12月3日
20,623円91	20,420円00	明治34年6月1日	明治35年3月25日	明治34年11月3日
40,519円488	40,519円488	明治35年7月5日	明治36年5月1日 / 明治36年4月1日	明治35年12月9日
33,709円72	33,700円00	明治36年6月3日	明治36年12月19日	明治36年11月10日
随意契約	6,236円00	明治36年6月10日	明治36年12月6日	明治36年11月13日
9,896円98	8,385円00	明治36年8月26日	明治37年2月21日	明治36年12月9日
3,600円90	3,595円00	明治36年9月2日	明治36年12月30日	明治36年12月10日
5,204円615	4,930円00	明治37年7月3日	明治37年10月10日	明治37年10月10日
				明治39年12月
				明治40年10月30日
5,023円57	4,999円00	明治40年7月13日	明治40年11月10日	明治40年11月10日
				明治41年3月31日
		明治40年10月2日		明治41年8月31日
随意契約	3,644円88	明治41年9月19日	明治42年4月30日	明治42年4月30日
随意契約	20,550円00	明治41年9月19日	明治42年7月31日	明治42年6月14日
随意契約	6,100円00	明治41年9月19日	明治41年12月31日	明治42年12月10日
随意契約	28,687円00	明治42年5月28日	明治42年11月30日	明治42年11月24日
随意契約	25,050円00	明治42年7月8日	明治42年12月25日	明治42年11月24日
1,948円00	1,920円00	明治42年9月28日	明治42年11月30日	明治42年11月25日
550円00	520円00	明治44年5月12日	明治44年6月30日	明治44年7月30日
1,540円00	1,537円00	大正元年8月22日	大正元年10月31日	大正元年10月31日
11,873円00	12,420円00	大正2年7月27日		大正2年11月23日
740円00				大正2年9月22日
39,358円45	38,470円00	大正3年5月28日		大正3年12月20日
21,659円10	21,640円00	大正4年6月18日		大正5年1月25日
				大正5年2月20日
				大正5年3月31日
				大正5年8月16日
				大正5年12月20日

事件名欄と主要建築欄で建築名称が異なるのは、竣工後に名称が変わったため。

表4-2 1900(明治33)~1917(大正6)年の各建築工事請負人・工事金額・各期

	年度	工事件名	主要建築	請負人
札幌農学校	明治33年度	博物館附属事務室一棟新築工事	博物館附属事務室(木1)	森田宇吉郎
	明治33 ~34年度	農学教室新築工事	農学教室(木2)・附属温室・附属ガラスハウス・附属舎	阿部 幣治
	明治34年度	経済学及森林学教室並昆虫学及養蚕学教室新築工事	農業経済学及農政学教室(木1)・昆虫学及養蚕学教室(木1)	庄司 惣助
	明治34年度	動植物学教室新築工事	動植物学教室(木2)	阿部 幣治
	明治35年度	理化学及地質学教室・動物学教室附属植物腊葉室・図書館書庫及読書室及渡廊下新築工事	農芸化学教室(木1)・附属素定量室/動植物学教室附属植物腊葉室(煉2)・図書館読書室(木1)・書庫(煉2)	阿部 幣治
	明治36年度	寄宿舎及同附属屋新築工事	寄宿舎(木2)・附属家・舎監室・食堂・賄所	大倉 糸馬 (中田虎象)
	明治36年度	教室暖房汽開室煙突煙道並暖房管溝新設工事	暖房汽罐室(煉1)	中田 虎象
	明治36年度	雨天体操場外五棟新築工事	雨天体操場(木1)・寄宿舎附属暖房汽罐室	篠原要次郎
	明治36年度	瓦斯製造所新築工事	瓦斯製造所(煉1)	大倉 糸馬 (中田虎象)
	明治37年度	正門及鉄柵並二木柵新設外十一廉工事	正門(煉)・鉄柵/中門(木)・木柵/門衛所(木1)	大島喜一郎
東北帝国大学農科大学	明治39年度	水産学教室新築工事	水産学教室(木2)	不明
	明治40年度	水産化学実験室新築工事	水産化学実験室(木1)	不明
	明治40年度	水産科臨海実習室外一棟新築工事	水産科忍路臨海実習室(木2一部1)	篠原要次郎
	明治40年度	水産実習室新築工事	水産実習室(木2一部1)	不明
	明治41年度	予科及実科教室新築工事	予科及実科教室(木1)	不明
	明治41 ~42年度	農学科硝子室新築工事	農学科硝子室(鉄1)・附属釜場	新開新太郎
	明治41 ~42年度	農芸化学教室及土壌分析室釜場外三棟新築工事	農芸化学教室(木1)・土壌分析室釜場・同附属分析室	新開新太郎
	明治41 ~42年度	予科及実科教室附属学生控所兼体操場並便所渡廊下新築工事	予科及実科教室附属学生控所兼体操場(木1)	新開新太郎
	明治42年度	林学教室及附属家新築工事	林学教室(木2)・林産製造及森林化学実験室薬品倉庫・標本倉庫・造林実習室	新開新太郎
	明治42年度	畜産学教室及附属家新築工事	畜産学教室(木1)・同附属屋	新開新太郎
	明治42年度	植物園門及柵修繕工事	植物園門(木)・柵	大星 三松
	明治44年度	植物園門衛所新営工事	植物園門衛所(木1)	新開新太郎
	大正元年度	事務所修繕工事	事務所修繕	新開新太郎
	大正2年度	水産学科実験室増築並模様替及暖房汽罐室増築工事	水産学教室増築 暖房汽罐室増築	大星 三松
	大正3年度	畜産学及獣並同附属建物外六廉増築及新営並移転工事	植物学温室(木1)・動植物教室植物学実験室(木1)・畜産学附属乾燥室/解剖室/小家畜病室/皮革製造室/畜産学及獣医学教室増築/畜産学附属蹄鉄及検査所増築/畜産学附属瓦斯発生室移転	大星 三松
	大正4年度	林学実習室外参観新営工事	昆虫飼育室(木1) 林学実習室(木2) 応用菌学教室(木1)	大星 鶴松
	大正5年度	札幌同窓会館新築工事	札幌同窓会館(木2)	大星 三松
大正5年度	中央講堂新築工事	中央講堂(木2)	不明	

註：表中「」は契約簿書に未記載のため。工事件名に を付しているのは工事関連簿書が所在不明。工

ならびに設計変更についても考察を加えたい。

農学教室 (p.a.016) では、入札以前に文部省より札幌出張所に対して設計変更の指示が出された。内容は、農学教室は各校舎の中で最も主眼を置く施設であるので、会議室、宿直室、応接室などを設置することとし、その結果として、安全上の問題から、左右階段に加え、中央に階段を設けることとなった。一九〇一年四月十八日に札幌市街で起こった火災により、工事途中で建具の大半を焼失したが、工事は順調に進行し、予定より三カ月早く竣工した。現存する設計図面 (p.a.017) は鳥口で精緻に描かれており、さらに墨汁による陰影が施されている。捺印やサインなどはないが、設計者である文部技師中條精一郎本人の直筆と考えられる。なお、農学教室以外の設計図面にはほぼ全てに「木村長助」の印が押されている。おそらくドラフトマン（浄写者）であろう。農学教室の図面に比較して、鳥口のエッジは鈍く、着色はあるが陰影は施されていない。

動植物学教室は、工事の途中、二階の廊下を教室に変更する指示があり、結果として建坪が二坪削減された。また、正面中央玄関上に、図4・2の鳥瞰図にはないセグメンタル・ペディメント（楕形破風飾り）が付け加えられている。背後に附属する煉瓦造の植物腊葉室内部 (p.a.023) には、アールヌーヴォー風の植物模様がデザインされた鑄鉄製の階段および手摺がある。この設計図面 (p.a.024, 025) も押印がなく、着色が施された精細な図面である。中條自身による描画と考えたい。

図書館読書室 (p.a.030) は、鳥瞰図と実施とは様相を大きく異にする。主棟の大屋根が寄棟から切妻となり、翼部の寄棟屋根も切妻へと変更された。さらに屋根頂部の換気塔が一つ加えられ二つになった。他の教室の変更点が細微であるのに比べ、この建物だけは大幅な設計変更が加えられている。当初、対面する予定であった大講堂が実現しなかったことに原因があるのかもしれない。

ところで、大講堂予定地には一九〇六年末に水産学教室 (p.a.032) が建築された。従来、その設計者について、



赴任経緯から類推して文部技手津吹龜太郎が指摘されてきた。今回、『札幌農学校水産学教室新築工事仕様書』（事務局施設部蔵）中に津吹の訂正印があり、津吹が水産学教室へ直接的な関与をしていた事実を確認することができた。

## 第二節 東北帝国大学農科大学への改組と古河家寄付事業

札幌農学校は、一九〇七年六月二十二日、仙台に置かれた東北帝国大学の一科大学としてその組織を改め、名称を東北帝国大学農科大学（以下、農科大学）とした。しかし、当時の日本は日露戦争後の財政難のため、農学校の昇格を含む三大学（札幌、仙台、福岡）の創立が危ぶまれていた。その局面を打開したのが古河虎之助による一〇〇万円の寄付金申し入れであった。この背景に時の内務大臣であり、古河鋳業会社顧問であった原敬の存在があった。このときの古河家からの寄付のうち、建築にかかる費用は総額九八万七千七百九十九円で、農科大学建築費として一三万五千五百九十九円が支払われた。この事業により建設された主な施設は竣工年月日順に、予科及実科教室（p.a.050）、農学科硝子室（p.a.041,042）、農芸化学教室及土壌分析室、林学教室（p.a.043,044,049）、畜産学教室（p.a.047,048）である。

この古河家支払事業の工事支払い手続きに関して、以下、『明治四十年 東北帝国大学農科大学建築工事実施手続及工費支払手続通牒綴』（事務局施設部蔵）を基礎資料に述べていく。

工事予定金額については文部省が管理を行っており、工事以前の測量などにかかる調査費用については「測量等其他起工前二要スル金額八本課ニ於テ予測致難中二付前以テ所用見込額通報相成致度候」とある。工事の実施手続は、基本的には文部省管轄工事とほとんど変わりはなく、入札保証金を必要としない点においてのみ相違する程度

であつた。ただ、「設計変更之義別紙之通決定相成古河家ノ同意ヲ得候」や「違約金ヲ徴スル場合ハ建築課長及會計課長ノ意見ヲ古河家ニ通知シ古河家ニ於テ決定スベキ事」とあるように、工事代金支払者である古河家が諸々の事項に対して最終的な決定権を持っていた。実施設計においては「實際之ヲ設計スルニ当リ學術研究及教授上ノ便宜且ナルベク記念トナルベキ設計ヲ為スベキニ付定総工費ヲ超過セザル範圍ニ於テ多少ソノ構造ヲ変更シマタハ坪数に増減ヲ生ズベク予メ承諾シ置カレタキ事」と記述されており、ある程度柔軟な設計変更が許されたらしい。古河家支払事業において建設された校舎の正面中央に「古河家寄贈」の文字が掲げられている（確認できたのは予科・林家・畜産学各教室の三教室のみ）のは、この「記念トナルベキ設計」を反映したものである。

実際の建築費支払い手続きに関して、古河家寄付金は第十五銀行に預けられ、在京の請負人に対しては建築課長久留正道自らが引き出して小切手を発行し、東京以外の請負人に対しては出張所長が請負人と建築課長との間に、領収証と為替券を交換する仕組みを取っていた。

なお、同時期、札幌区からの一〇万円の寄付金をもって東北帝国大学農科大学設立費が計上され、水産学科関連の諸施設が建築された。

古河家寄付事業に関しては、これまで文部技師新山平四郎がすべてを担っていたとされていた。しかし、事業開始当初は、津吹がいまだ所長心得としてその任にあつた。津吹は一九〇六年六月二十日、札幌出張所長心得として赴任、翌年五月一日まで在職したとされてきたが、建築一件書類中に一九〇七年七月四日付の文部省からの書簡がある。新山が所長として実際に札幌に赴任するのは、履歴書では六月二十一日とあるが、実際にはそれより後のことで、文部省との往復文書中に新山の名前を最初に確認できるのは七月四日である。なんらかの理由で新山の札幌赴任が遅れたのであろう。また、工事契約は予科及実科教室のみ指名入札により執り行われた。落札者は不明だが、この時点で学長佐藤昌介は以前に請負実績のある阿部幣治や篠原要次郎の提示する入札額の算定に対して不信任を

抱いており、これ以後の工事は、佐藤の推薦により新開新太郎が随意契約を結び請け負うことになった(『明治四十二年度 東北帝国大学農科大学林学教室及附属家新築工事書類』事務局施設部蔵)。新開は小樽の大手請負業者加藤忠五郎が経営する大虎の札幌支店を任されていたが、札幌農学校時代の請負業者のような目立った建築請負実績はない。なぜ、これほどまでの一大工事を随意契約で請け負うことができたのか、不明な点が多い。

一九一一年四月一日、会計課に臨時建築係が設置される。大学内に初めて設置された独立した建築組織である。とはいえ、この組織には設計業務を委嘱された建築技術者は存在しない。新山平四郎が二年十二月に退職し、一七年九月に浦五十吉が嘱託されるまで文部大臣官房建築課札幌出張所長は不在となるが、その代役を担ったと考えられるのが、請負業者大星鶴松・三松の兄弟である。通常、このようなことは考えがたいが、前述のように設計を担う建築技術者が不在であること、仕様書に札幌出張所箋ではなく請負業者である大星の用箋を用いていること、しかも仕様書が入札以前に書かれており請負人が仕様を記載した工事を入札にかけることが不自然であること、仕様書中の訂正印が出張所関係者印ではなく大星の印を用いていること、設計図面にも大星鶴松・三松の署名および押印あることなどから、大星兄弟が大学の営繕組織と深いつながりを持ち、大学営繕を短期間ではあるが代替していたと考えるのが妥当であろう。この一連の工事で学長佐藤昌介から信用を得た大星三松は、佐藤から特命で札幌同窓会館(p.a.056,057)の設計・施工を依頼される。

単科大学時代の最後を飾るように、否、新たなる総合大学への道を歩み始めるにあたり一九一六年暮れ、キャンパスの南端に中央講堂(p.a.053,054)が竣工する。全体のプロポーションはフレンチ・ルネサンスながらも、前面を総タイル貼りとし、開口部周りを幾何学的にデザイン処理し、かつ垂直性も強調した、新しい時代の幕開けといえる建築であった。

## 第三節 植物園および農場の施設整備

開拓使廃止後の一八八四年、勸業課所管だった博物場および附属地など一万五千余坪が札幌農学校に移管されたことに植物園の歴史は始まる。八六年には北一条キャンパスにあったL・ベーマー設計の温室(p.a.264)が植物園内に移築され、一九〇一年には中條精一郎設計により博物館事務所(p.a.266)が建築され、一九〇三年には温室が増築(p.a.265)された。一年の皇太子(後の大正天皇)来園にあたっては、門衛所と正門(p.a.267)が新築された。

一方、札幌育種場から移管された敷地にあつた旧育種場施設は、一八八七年から九〇年にかけて大幅に増改築を加え、農芸伝習科ならびに農学校生徒の農業実習や試験栽培の場となった(p.a.286,287)。北一条からのキャンパス移転に伴い、第二農場とサクシユコト二川を挟んで配置していた第一農場施設は、一九〇四〜一九〇五年に北一条七丁目付近(現理学部北側)へ移転した(p.a.294,295)。

第二農場も、第一農場との機能分化と農場施設拡充を目的とはいいながら、実際には、一九〇七年の農科大学設置により第二農場付近に予科教室が建つたこと、札幌市街域の鉄道以北の拡張による火災延焼の懸念、さらに建設後三〇年以上を経た農場施設の老朽化が顕著となってきたため、一九〇九年から北一条の現在地へ移転および新築工事にとりかかり、一二年に完了した(p.a.317)。